



教職大学院 Newsletter

No. 167

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4

2023.2.18

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2023 HYBRID (対面-Online) SPRING SESSIONS 特集号

**実践し
省察する
コミュニティ**

*Round Tables:
Spring Sessions 2023
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2023 Spring sessions
18(sat) 9:00-17:40
19(sun) 8:20-14:00
福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究
学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2023.2.18-19

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
協賛：各所属研究科

online-offline hybrid sessions with Zoom

内容

ようこそ 福井ラウンドテーブルへ	
Welcome to Fukui Round Table	(2)
全体スケジュール	(4)
Special Session	
教職大学院改革特別フォーラム	(5)
Zone A 学校/インクルーシブ	(6)
Zone B 教師教育	(7)
Zone C コミュニティ	(8)
Zone D International	(9)
Zone E 探究	(10)
Round Table Cross Sessions	(11)
実践し省察するコミュニティを結び支える	(12)
ラウンドテーブルの歩み	(14)
福井大学連合教職大学院が実践する教育改革 グローバルコミュニティへの誘い	(16)
アーカイブ	(18)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2023年2月の開催をもって44回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にてSPRING SESSIONSを開催いたします。2月18日(土)には、教職大学院改革特別フォーラム、5つのテーマに即したZONE SESSIONS、2月19日(日)には小グループ(5-6名程度)で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

【対面-オンライン(Zoom)のハイブリッド・セッションについて】

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡申し上げます。

(1) **2月17日(金)**: 2月18日(土)申込 ZONE ごとの Zoom URL をお知らせします。

(2) **2月18日(土)**: 2月19日(日)ラウンドテーブルの Zoom URL をお知らせします。

*Zoom URL が未受信の場合には dpdtfukui@yahoo.co.jp 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間までに Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。

ようこそ 福井ラウンドテーブルへ Welcome to Fukui Round Table

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教授 木村 優

ようこそ 福井ラウンドテーブルへ。このたびはオンサイト・オンラインどちらも、初めての方・常連の方どちらも、福井ラウンドテーブルにご参会いただき誠にありがとうございます。福井大学大学院連合教職開発研究科スタッフ一同、あなた様のご参会を心よりお待ちしております！

教育にかかわる実践者が学び合う場として生まれた福井ラウンドテーブルは、この 20 年余りをかけて日本各地に、さらに国境を越えて世界各地に伝播しています。こうしたグローバルでダイナミックな展開の中で、ラウンドテーブルは各地で実践者の学び合いを越えて、子どもたち・若者たち・大人たちが出会い、関係の糸を紡ぎ、それぞれの学びや探究のプロセスを持ち合い、膝をつけ合わせて、肩を寄せ合って、学び合い、育ち合う場へと進化していています。

こうしてラウンドテーブルが各地で生まれ育つ中で、福井ラウンドテーブルもまたラウンドテーブルの「メッカ」として進化を続けています。このラウンドテーブルの魅力をあなたと分かち合いたく、この場（スペース）を借りて、福井ラウンドテーブルの構成とその意味を改めて紹介させていただきます。

毎回の福井ラウンドテーブルでは、DAY 1 午前には Session I として特別フォーラムが開かれます。これは、福井大学大学院連合教職開発研究科のミッションにもとづく、日本全国・世界各地の教師教育・教員養成のステークホルダーとのコラボレーションを推進するセッションになっています。ポスト教員免許状更新講習や教員養成フラッグシップ大学構想などなど、教育改革目白押しの昨今ですので、この特別フォーラムがこうした教育改革にとって重要な投錨点になることでしょう。

なおこの DAY 1 午前、過去には東アジアや欧米の研究者を招聘して国際フォーラムも開かれています。2015 年 2 月には、世界で 5 本の指に入るスーパー教育学者アンディ・ハーグリーブス教授を招聘し、DAY 1 午前に国際フォーラムを企画開催させていただきました。あの時は、教授の著書の翻訳本『知識社会の学校と教師』（金子書房、2015）の発刊記念をあわせての招聘でした。こうした国際フォーラムが開かれえるのも福井ラウンドテーブルの魅力の一つです。

さて話を戻しましょう。特別フォーラムに続いて DAY 1 午前から午後にかけてポスターセッションが開かれます。このポスターセッションでは、世代を越えて子どもたち・若者たち・大人たちがそれぞれの遊び・学び・探究・実践の挑戦を報告し、聴き合います。物事を前に進める多様な活動が織りなすポスターセッションの活気あふれる環境は、きっとあなたの挑戦を刺激することでしょう。

ポスターセッションの後は SessionⅡ「学校・教育・地域を考える 5 つアプローチ」に移ります。このセッションでは、5 つのテーマに分かれた ZONE ごとの対話が行われます。A：学校、B：教師教育、C：コミュニティ、D：国際、E：探究、それぞれの ZONE でこれまで進めてきた対話と発見にもとづいて企画デザインされたシンポジウムやフォーラム、ワークショップが行われます。どの ZONE のどの企画でも対話が重視されていますので、ぜひあなたがお考えになったことや気づかれたことを気軽に共有してください。あなたの「声」が、それぞれの ZONE の対話を実り豊かにしてくれるのです。

DAY 2 はいよいよ SessionⅢ、ラウンドテーブル・クロスセッションです。ラウンドテーブルの文字通り！福井ラウンドテーブルです。ここで「ハッ！」とした方、「なんだって！？」と驚いた方がおられるかもしれません。そう、ラウンドテーブル・クロスセッションこそがまさに福井ラウンドテーブルのメインセッションなのです。この DAY 2 ラウンドテーブル・クロスセッションに参加しないということはどのような意味を持つのか、それはまるで、念願の高級レストランを予約して、いざ念願のコース料理を頼んだのに、メインディッシュが来る前になぜかテーブルをあとにしてしまうようなものです。福井ラウンドテーブルの醍醐味こそ、まさにこのラウンドテーブル・クロスセッションで体感することができるのです。

実を言うと、DAY 1 の ZONE ごとのセッションは、福井ラウンドテーブルの「入口」にすぎません（こう「すぎません」と言うと少し語弊があるかもしれないのですが本当の話です。先ほどの高級レストランのコース料理の喩えで言えば、前菜、アンティパストが ZONE セッションといえます）。なぜなら ZONE は見ての通りテーマ別のセッションですので、私たちの関心と対話はどうしてもテーマの中で均質になってしまうのです。もちろん、同じ関心や似た立場の人が集まるので、テーマに関する深い対話はできるのですが、発想の拡がりに欠けてしまいますし、何より多様性が少ないので対話が生み出す想像・創造も膨らみにくいものです。

一方、ラウンドテーブル・クロスセッションでは、それぞれ異なる関心、立場、仕事、世代年齢の人々 6 人ほどがテーブルで一堂に会します。そこでは、あなたが見たこともない、聴いたこともない実践、いや、もしかしたら、誰もが体験したことのない超最新・最前線の実践を目の当たりにし耳にすることができます。そして、偶然に（これも実は偶然ではなく、福井ラウンドテーブル実行委員会スタッフが 1 ヶ月以上前から準備し、DAY 1 終了後に練りに練って仕上げた）テーブルをともにしたメンバーが互いを知り合い、関係を築くことで新しいノット（結び目）が生まれ、新しい学びや探究や実践や研究がつながっていくのです（ネットワークングそしてネットワークング）。

もしも DAY 1 だけの参加を予定していた方は、今からでも遅くはありません。ぜひぜひ予定を調整して、DAY 2 にもご参加ください。それでも、どうしても DAY 2 に出られない方もご安心ください。福井ラウンドテーブルは年間 2 回、6 月と 2 月に開かれます。ぜひ次回の福井ラウンドテーブルでは DAY 2 にご参加ください。いつでも私たちは Welcome です。

それでは、Please enjoy Fukui Round Table! きっとあなたは今回の福井ラウンドテーブルでいろいろな気づき、発見をすることになるでしょう。そして、多くの新しい仲間に出会い、新しい関係の結び目を見つけ、その結び目を紡いで、新しい世界を新しい仲間と共創していくことになるでしょう。その共創の仲間に、私たちスタッフも入れてくださると嬉しく幸せな限りです。

We' re looking forward to seeing you soon!

全体スケジュール

実践研究
福井ラウンドテーブル
2023 Spring sessions

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

2/18(sat) 9:00-11:00 (zoom 接続開始 8:40)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 9:00-11:00

教師教育/教員養成フラッグシップ

：「新たな教師の学び」を支える協働のために
学校における学び合うコミュニティの展開と教師教育改革の展望

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20 (zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 (zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校/インクルーシブ: 21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
- B 教師教育: 学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成
- C コミュニティ: 持続可能なコミュニティをコーディネートする
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究: 学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたをみんなでかんがえる

2/19(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。
次の URL から申し込み可能です。 <https://forms.gle/Vv9wK99aXaPLsBvKA>
- 2/19 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
- 2/19 の session III の参加についてのお願い＝午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。
8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。
プログラムの変更等があり得ます。
詳しくは最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。
実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2023.2.18-19

by FK 2022.11.11

2 / 18 (sat) 9:00-11:00 (zoom 接続開始 8:40)

Special Session 教職大学院改革特別フォーラム

「新たな教師の学び」を支える協働のために

学校における学び合うコミュニティの展開と教師教育改革の展望

2022 年12 月19 日に中央教育審議会から『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』が出された。ここで「新たな教師の学びの姿」として、子供たちの学び（授業観・学習観）とともに教師自身の学び（研修観）も転換し、教師にも「主体的・対話的で深い学び」が求められることが改めて確認された。

本フォーラムではこれまで、理論と実践の往還・融合、教員免許更新制廃止後の研修改革、教員養成フラッグシップ大学構想といった点から教師教育改革の展望を共有してきた中、学び合うコミュニティを培う校内研修とそのネットワークが改革の重要基盤となることが前回改めて確認された。学校を教師が学び合うコミュニティとして持続的に発展させるために、どのような取り組みが求められるか。福井の公立中学校での実践の展開を事例にした前回に続き、今回は福井の公立高校での取り組みに注目したい。以前は高校での校内研修がなかなか進まないと言われることがあった中、少なくともここ数年の福井県内の公立高校の中には、確実に校内研修を進展させている学校が多数あり、地殻変動とも言える状況となっているからである。

今回は特徴的な取り組みを展開している2つの県立高校の実践事例を共有しながら、学校で教師が持続的に学び合うことを支える教師教育改革の展望を探りたい。

趣旨説明

情勢報告：中教審答申後の教師教育政策の動向

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長 小畑 康生

実践的提案1：

福井県立若狭高等学校 教諭 兼松 かおり

実践的提案2：

福井県立武生高等学校 教諭 辻崎 千尋

コメント

独立行政法人 教職員支援機構 理事長 荒瀬 克己
他

省察と展望

福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授 柳沢 昌一
〈コーディネーター〉 福井大学 理事（企画戦略担当）・副学長 松木 健一
福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 遠藤 貴広

Poster Session I ポスターセッション11:20-12:20 (zoom接続開始11:00)

Poster Session II ポスターセッション13:10-14:10 (zoom接続開始12:50)

2/18(sat) 14:30-17:40 (zoom 接続開始 14:00)

学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ

Zone A 学校

(対面・オンラインのハイブリッド開催)

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

ー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探るー

Zone A は、これまで「21 世紀型の学びを支える教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げて、学校や園が持続・発展していくための授業改革・教師協働の在り方について考えてきました。加えて、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる教育の在り方についても議論を積み重ねてきました。そこでは、子どもが自らの自分を出しにくい学校の状況があり、また教師も「主体的・対話的で深い学び」を実現することが難しいなどの悩みが共有されてきました。このような状況を踏まえつつ、教師間、子ども間、教師と子ども間の学習コミュニティの学びを深めていくためには、対話や協働の在り方をもう一度見つめ直すことが重要である点を参加者とともに共有してきました。これらの視点は、教育・保育を考える上で極めて重要だと言えます。前回2022 Summer Sessionsでは、子どもたちとのくらしや授業の中での「探究」を支える教師協働の在り方や、子どもたちの主体的な学びを支えていく過程での学校の変容に焦点を当てて議論してきました。

そこで、実践研究福井ラウンドテーブル2023 Spring Sessionsでは、子どもが個性や能力を発揮し、学び合い育ち合う学校を実現するために、一人ひとりの子どもに寄り添って学校の当たり前を問い直し、教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかについて、そこでのリアルや苦労なども含めて参加者のみなさまと共に協働探究し、子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師の対話や協働の質をいかに高めていくのかを検討したいと思います。

Connection 14:00-14:30

オンライン接続

Orientation 14:30-14:40

オリエンテーション

対面会場 教育系 1 号館 2 階大 1 講義室

Session I 14:40-16:00

Symposiums

<シンポジウム>

「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」

<シンポジスト>

14:40-15:00

信州大学教育学部附属松本小学校

教 諭 片原 範子

15:00-15:20

福井県大野高校 定時制

教 頭 上中 一司

探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたちが学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきます。

全体討議

15:20-16:00<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院

宮下 正史

<休憩>

16:00-16:20

Session II

16:20-17:40

Breakout Room 対面会場は当日ご案内します

Cross-session

現状共有と明日への展望

Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

(オンライン開催)

学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成

－教師の力量を高める校内研修の在り方－

今日の学校教育においては、これからの変化の激しい時代の中で持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が大きな課題となっています。教師は主体的・継続的に学び、協働して力量を高めていながら、互恵的に学び合い高め合う組織づくりにも一層取り組んでいく必要があるなど、学校は大きな変革の中にあります。また、自治体、学校、地域、大学をつないだ広いコミュニティの中での教師の学び直し、Society5.0 という社会を見据えた学校組織の新しい在り方が求められています。

Zone B「教師教育」では、教師の主体的・対話的で深い学びを目指した校内研修や協働研究の在り方について、展望を拓いていきます。今回のZone B では、協働研究に取り組む教員の実践や、先進的に改革に取り組んでいる学校の変化などの多様な実践を共有し、校種を超えて学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成の在り方について共に考えていきたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Orientation 14:30-14:40

Session I 14:40-16:40

Symposium

<話題提供> 行政

福井県教育庁 学校教育監

中森 一郎

<実践報告>

大野市立陽明中学校 校長(前 大野市立下庄小学校 校長)

大石 貴昭

福井大学教育学部附属義務教育学校 後期課程 研究主任

藤川 洋平

<インタビュー>

福井大学連合教職大学院 教授

清川 亨

福井大学教育学部 助教

小林 溪太

<進行>

福井大学附属義務教育学校 校長

福井大学連合教職大学院 教授

牧田 秀昭

(敬称略)

自律的に学び続ける教師集団の校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

Session II 16:50-17:40

Forums

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の取組にどのように生かし、つなげることができるか、小グループで協議します。

ZoneC コミュニティ

(オンライン開催)

持続可能なコミュニティをコーディネートする

～世代間の相互作用は地域に何をもたらすのか～

Zone C では、持続可能なコミュニティをコーディネートするというテーマで、地域の学習活動を支える公民館主事の方、地域の活性化に取り組んでいる方、そして地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方などが集いながら、シンポジウム等で対話を通じ、長く探究を続けてきました。

若者や外部の視点を取り入れ、地域を活性化させていこうという動きも報告されました。その後、地域と学校の連携などと言われるようになり、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」の範囲を少しずつ大きくしながら、今はいろいろな地域の支え手（主事さんをはじめ、学校、若い世代など）が地域とどのように関わり、どのような取り組みをしているのかに焦点を当ててきています。

例えば、学校現場においては、地域住民の協力を得ながら地域の産業や自然を活用した取り組みをしたり、地域における課題解決に向けて児童・生徒が主体的に活動をし、学校と地域が一体となって展開したりする取り組みも進められています。「総合的な探究の時間」で探究活動を行う高校生が、地域と関わり、地域を活性化していく取り組みも盛んになりつつあります。

Zone C では、今回は高校生たちがどのように主体的にまちづくりと関わり、どう活動を展開しているのか、また地域の公民館と中高生がどのように互いを巻き込み合いながら、どう活動を展開しているのかといった視点で報告をいただきたいと考えております。彼らの活動が地域を活性化し、彼ら自身も元気になっていく姿が見えます。

私たち自身が、こうした取り組みを共有し、つどい、つながり、新たな価値をつむいでいくことを通して、いかに持続可能なコミュニティをコーディネートすることができるのか、それぞれの活動も振り返りながら、世代間の相互作用は地域に何をもたらすのかを対話を楽しみつつ探っていきたいと思えます。

14:30～14:40 主旨説明

14:40～16:05

Session I 「つながる想い・広がる世界～高校生によるまちづくり～」

半田智咲氏（福井県立福井商業高等学校2年、学生まちづくり班3・4期生、「高校生プレイヤー」として活動中）

コーディネーター：河合恭江

14:40～15:15 実践報告・質疑応答

15:15～15:45 小グループでの話し合い（自己紹介含む）

15:45～15:55 休憩

15:55～16:05 全体共有

16:05～17:15

Session II 「地域を創造し、思いやりの心を育てる～公民館活動を通して～」

田中典子氏（福井市社北公民館主事）

コーディネーター：嶋田直美

16:05～16:40 実践報告・質疑応答

16:40～17:05 小グループでの話し合い

17:05～17:15 休憩

17:15～17:40

全体共有と全体セッション～ふり返りと展望～

全体ファシリテーター：富永良史

Zone D International

(Online)〈同時通訳あり〉

International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education Reform through Lesson Study

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). **Zone D** International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

Since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study.

In June 2021, Nalikule College of Education shared their initiatives and collaborative learning through lesson study in their own context in **Zone D**. From June 2022, teachers who have studied at university of Fukui also share their progress.

This Zone will consist of two sessions; symposium and “Roundtable”. In the symposium, the symposiasts will discuss the purpose approaches, results, and challenges of lesson study in their contexts. In the “Roundtable”, educators from various countries will share their lesson study practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will stimulate you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated to Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。

2021 年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校との協働と連携して実施しています。加えて2022 年6月からは、福井大学教職大学院で学び、帰国後授業研究に取り組んでいる実践の報告も行っています。そこでは、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。このZoneでの事例紹介と議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることを期待しています。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、**日-英の通訳を行います**ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用のZoomに接続するためのデバイスを**別途**ご用意ください。

Session I 15:00-16:00 Symposiums

1. Lesson Study in Nalikule College of Education and its Demonstration School
2. Importance of Lesson Study in developing country's Education

<Symposiast> Mr. Kondwani Daniel Vwalika, Nalikule College of Education
Mr. Chhoem Sosakkona, Kor Koh secondary school, Cambodia
<Moderator> Mr. William Tjipto, University of Fukui
<Commentator> Mr. Masato Kosaka, University of Fukui

Session II 16:20-18:00 Roundtable

Sharing and learning from each other's practices in small groups.

The following guest speakers are placed in each group: Mr. Khanyile & Ms. Shongwe (Eswatini), Mr. Sankura, Mr. Yoseph, Ms. Madebo & Mr. Tefera (Ethiopia), Ms. Chiwaya, Ms. Malema, Mr. Phiri & Ms. Chanya (Malawi), Mr. Murwanashyaka (Rwanda), Ms. Boqwana, Ms. Billa & Ms. Mokotjo (South Africa), Mr. Amanyana, Mr. Ezati, Ms. Kalule & Mr. Mudde (Uganda), Mr. Smit & Ms. Manyando (Zambia)

Closing 18:00-18:10 Ms. Kyoko Ishii

Zone E 探究 たんきゅう 学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える まな おし まなが 〇〇学校の困り感（事）にチャレンジしよう がっこう こま かん こと

Zone E 探究では、「学びと教えの新しいすがたカタチ（ニューノーマル）」をテーマにして、子どもたち・若者たちと大人たちが世代を超えて探究します。

今回は、ラウンドテーブルでの「学び」と「探究」を学校での「学び」と「探究」にしっかりつなげることを大事にして、ある困り感（事）を抱える〇〇学校を題材に、みんなでその〇〇学校の困り感（事）にチャレンジするワークショップをおこないます。それぞれの学校での学び・探究のけいけんとちえをわかち合って、みんなではっそうを飛ばして学校の困り感（事）にチャレンジしましょう！

1. 日程 2022年2月18日（土） にっ たい ねん がつ にち どようび

- 11:00 - 11:15 受付1 ☆ うけつけ
- 11:20 - 12:20 ポスターセッション1 ☆
- 12:25 - 13:00 受付2 ☆ うけつけ
- 13:10 - 14:10 ポスターセッション2 ☆
- 14:30 - 17:40 ワークショップ「〇〇学校の困り感（事）にチャレンジしよう」
【進め方】

- (1) 〇〇学校の困り感（事）しょうかい がっこう こま かん こと
- (2) チャレンジワークその1
- (3) プチ・レポート 困り感（事）にチャレンジしている学校 がっこう
- (4) チャレンジワークその2 & アイデアのシェア

2. 会場 対面： 福井大学文京キャンパス かいじょう たいめん ふくいだいがくぶんきょう

- | | |
|------------------------|---|
| 受付 <small>うけつけ</small> | 教育系1号館1階ロビー <small>きょういけい ごうかん かい</small> |
| ポスターセッション | 教育系1号館1階・2教育系1号館1階の教室（予定） <small>きょういけい ごうかん かい きょういけい ごうかん かい きょういけい ぎょうてい</small> |
| ワークショップ | 総合研究棟 I 13階 大会議室 <small>そうごうけんきゅうどう かい だいかいぎしつ</small> |

オンライン： Zoom

★ポスターセッションで、遊び・学び・探究・プロジェクトを発表して下さる子どもたち・若者たち・大人たちを募集しています。ご発表いただいた方には 福井大学大学院発行 発表認定書 はっぴようにんていしょ をお贈りいたします。ポスターセッションの2つの時間の前後に、受付をおねがいします。

2 / 19 (sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

【対面】		【オンライン】		ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。 グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。
		接続	7:50-8:20	
①はじめに	8:20-8:40	①はじめに	8:20-8:40	
②自己紹介	8:40-9:00	②自己紹介	8:40-9:00	
③報告Ⅰ	9:00-10:40	③報告Ⅰ	9:00-10:40	
④報告Ⅱ	10:40-11:40	④報告Ⅱ	10:40-11:40	
ランチ・ブレイク				
⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聴き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5 時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうと具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1 年、2 年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1 年、そして 2 年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実が動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。（1 報告 60-100 分）
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。（6 名程度）
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。（学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか）
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

（柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31）

ラウンドテーブルの4重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。

Co-reflection in and on longitudinal process of practice

II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。

Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice

I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル

III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。

Cultivating Communities of Public and Reflective Learning

IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2022.11

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
- 2001.11.10-11 実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働(第 1 回)
For Reflective Practice、Professional Development、and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者 20 数名)京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む)(第 3 回)
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 4 回)
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第 5 回)
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第 6 回) 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海～2009)
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第 8 回 参加者 100 名超)
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第 10 回)
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第 12 回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 14 回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 15 回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回)稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第 17 回)5 つの領域:専門職として学び合うコミュニティ
(分野ごとのセッション始まる)
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二

2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を超える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回) 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回) 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回) 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions(第 33 回)参加者総数 566 名 10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2018.2.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions(第 34 回)参加者総数 627 名
2018.6.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions(第 35 回)参加者総数 476 名 10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
2019.2.15-17	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions(第 36 回)参加者総数 930 名

- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions(第 37 回)参加者総数 426 名
9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、
11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、
12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2020.2.15-16 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度
3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
- 2020.6.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions(第 39 回)参加者総数 500 名程度
11.21 東京サテライトラウンドテーブル
11.21 関西ラウンドテーブル
- 2021.2.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions(第 40 回)参加者総数 550 名程度
2021.6.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions(第 41 回)参加者総数 560 名程度
11.13 東京サテライトラウンドテーブル
11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
- 2022.2.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2022 spring sessions(第 42 回)参加者総数 660 名程度
2022.6.18-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2022 summer sessions(第 43 回)参加者総数 640 名程度
8.4 宮古島ラウンドテーブル
11.26 東京ラウンドテーブル

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘いざない ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦

過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA² ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ(革新的)なローカル・コミュニティが集まる大きなコミュニティの「坩堝(るつぼ)」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことの無い新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション(解)」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可

能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院とJICAとの連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた(ピア)を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと(ウェンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002)。

² 現代社会の特徴を表す4つの言葉: Volatility(不安定)、Uncertainty(不確実)、Complexity(複雑)、Ambiguity(曖昧)の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織=機構のこと(ショーン, 2017)。

Archive

—アーカイブ—

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions と、ラウンドテーブル 2012 Summer Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No. 125 (19.07.22) と No. 139 (20.11.14) からご紹介いたします。

Newsletter No.125(19.07.22)より

視点を变えて 何度でも自分の実践を捉え直す

学校改革マネジメントコース2年／福井市六条小学校 主事 寺前 公恵

ラウンドテーブルに参加すると、いつも何とも言えない充実感を味わうことができる。そこに集まる人たちの学ぶことへの強い思いに勇気とやる気をもろう。めまぐるしい忙しさの学校現場から、ちょっと離れ、リフレッシュするような、そんな感覚である。しかし、今回はそうも言っていない状況であった。ZoneCで清明公民館の金木美東里さんと二人でシンポジストをさせていただくことになったからである。テーマは、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」であり、サブテーマとして、「地域と学校のつながりを編み直す」が掲げられていた。私は、これまで、自分の実践を、何度か発表させていただいているのだが、そのたびに、テーマや聴き手のニーズを考え、発表内容を吟味してきた。今回は、学校関係者より、どちらかと言えば、各公民館の主事さんが多く参観される。「どうすると主事さんに伝わるのか・・・」手直ししている、その時間もまた捉え直すきっかけになった。シンポジウムでは、独りよがりな一方通行の発表にならず、聴き手の思いに耳を傾け、自分がその場で感じたことを大切にしようと思っていた。どんな思いが湧き出るか楽しみだった。

しかし、発表前の打ち合わせの時に、もう、その瞬間はやってきた。コーディネーターの水野先生から「持続可能なコミュニティ」について丁寧に説明してくださった上で、事前に質問内容を教えていただいた。地域と連携した総合の実践の中で、「①子どもたちの関係性の質がどう変わったのか。②自然とのかかわりで、体験以上の学びが深まったことについてはどうか。③地域の方の願いを子どもたちはどのように受け止めたのか。」である。聞きながら、私の頭の中は大変なことになっていた。思いはあふれるほどある。いろいろなシーンがぐるぐると早送り登場し、私は必死で言葉を紡ぎ出そうとしていた。水野先生からは、「持続可能なコミュニティ」のお話の

中で、「もしかすると、いじめにあった子や傍観者の地域へ戻りたい思いを壊しているかもしれない。そういう子たちが、総合によってどんなふうになっちゃったのか」と言われたこと。強く心に残っている。「私は、あの子たちを地域に戻りたいと心から思える子どもたちにすることができたのだろうか・・・」自問自答しながら聞いていた。「できた」と言い切る自信はない。しかし、間違いなく言えることは、生き生きと活動している子どもたちの嘘のない姿がそこにあったということである。水野先生からのお言葉で、改めてその視点で捉え直すことができた。

司会の富永先生からは、シンポジウムのはじめに参観者に対して「公民館にあって、学校にないもの。学校にあって公民館にないもの。2つの似ているところと違うところはないか」という呼びかけがあった。私は、シンポジウムの間、ずっとそのことを考えていた。金木さんの「子どもの思いを大切に。待つ姿勢」には大変共感できた。しかし、学校現場には、公民館のような「背中を押す」「子どもを待つ」指導には限界があるのではないかと感じている。公民館には、緩いつながりや選択できる面白さ、家族的な雰囲気、大学生で言うならば、サークルやバイトのような、絶対的、強制的ではない空間がそこにはある。居場所を求めてふらっとやってきて、そこでつながる仲間がいる。制約はあるとしても、そのことだけに浸る時間がある。公民館で様々な行事があるように、学校でもプロジェクト学習や行事を創り上げる機会はある。しかし、教師はただ見守っているだけでなく、そこに教科としての知識・技能や学び方の力を身につけていく使命があるのだ。時間数などの細かな制約もある。それでも、私は、個人的に、教員にできる「一人一人の子どもをじっくりと見る。子どもを待つこと。子どもの思いに寄り添うこと。」を大切に

にしたいと考えている。富永先生により、金木さんと、それぞれの立場で、わかり合えた気がした。

参観者の玉川大学の濱田先生からは、「フレーム」の話があった。2日目のグループ討議でも松木先生から出てきた話題なのだが、「一度活動を行うと、同じフレームに先生方はあてはめたくなる。各学年ごとのテーマが決まってくる」それは、カリキュラムのことであった。「その同じフレームの中で、活動を組み替えようとしたことがおもしろい。」と言われた。

「地域に巻き込まれる活動」の視点で伝えた「米作り」の実践について、お二人の先生方に、そういう形で捉えていただけて、大変勉強になった。

そのほか、松木先生からは、「インクルーシブ教育」「プロジェクト学習」についてのご意見もあった。「気がかりな子どもも含めて一人一人が活躍できる

学習」である。国語・算数では、スタートからゴールまできちんと習得させることもあり、立ち位置がばらばらでは困るけれど、総合ならば、それぞれの立ち位置や思いで活動を進めていく利点があるということをおっしゃっていた。濱田先生からは、地域の最も重んじている宝（人・もの・こと）が学習の材であるならば、それは子どもたちにとっても重要で、だからこそ、学びは深まるのではないかと言われた。

ラウンドテーブルのよさは、聴き手の方から様々な視点でご意見をいただき、自分の実践を、何度でも違う視点で捉え直すことができるところだと改めて実感している。今回、水野先生、矢内先生、半原先生、富永先生の、鋭くもあり、温かなご助言のおかげで、安心して、自分と対話しながら捉え直すことができ、深く学ぶことができた。

ラウンドテーブルで改めて気づいた「対話の大切さ」

学校改革マネジメントコース2年／坂井市立加戸小学校 藤野 秀樹

1日目 ZoneA 「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」

福井大学附属義務教育学校前期課程の五十嵐洋行先生の「社会創世プロジェクトのデザインと実際」という発表をお聞きした。長期的なプロジェクト型学習を積み重ねることで「社会に意思をもって生き、自律的な学びができる子供を育てるために必要な資質・能力」の研究開発という課題に向かって協働しているということだった。その協働体制について紹介された中で、前期課程・後期課程合同の教科部会が時間割上に組み込まれているということが素晴らしいと感じた。また、月1回のペースで開かれる研究会だけでなく、職員室の座席にもフリーアドレス制を取り入れているとお話をお聞きし、「協働」していくための「対話」の重要性を意識されているからこそその取り組みなのだなと感じた。

続いて、福井県立若狭高等学校の小坂康之先生の「探究的な学び」という発表をお聞きした。高校での探究的な学びをデザインする取り組みについての発表だった。研究部が中心となって行う打ち合わせだけではうまくいかないとのこと。そこで、探究的な学びを支えるコミュニティとして、①授業研究会②若手指導力向上塾③「探究」のつどいの3つがあるとのこと。お話をお聞きして、公的な組織だけでは、「やらされ感」は払拭できない、教師の学びが続いていく

ためには、自主的なコミュニティづくりが必要なのだなと改めて感じた。

お二人の発表を受けてのシンポジウムでは、大谷大学文学部教授・福井大学連合教職大学院客員教授の荒瀬克己先生のお話が心に残った。改訂された学習指導要領の前文にある教育課程についての定義・目標について触れられ、「これからの学校には、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識することができるようにすることが求められる。」というのは、現状の裏返しではないかと話された。また、いろいろと「自己肯定感」の低さが指摘されているが、「主体的に」学ぶには「自己肯定感」があってはじめてできるので、「探究」は、学びの主体が「子ども」であるので、学びの中で自分のよさや可能性に気づくことができるということも話された。そして、そのようにできるように学校の中で話し合い、計画、実行し、振り返るというサイクルの中で実現するとよいというお話だった。

シンポジウム後のフォーラムでは、メンバーは、幼稚園の園長先生、コンサルタントを目指している高校の先生、単位制の定時制高校の先生、小学校教員2名、そして、若狭高等学校の研究部に所属する村先生の6名だった。話し合いは、村先生の「『探究』の学びが教職員に思うように伝わっていない。」という悩みに他のメンバーがアドバイスする形になった。そ

の中で、「求めすぎてはいけない。」という意見、「反対の人には、『自分にはなかった視点です。』というアプローチが有効。」という意見が印象に残った。そして、なんとといっても、ここまで熱く語れる2年目の先生がいることに大変驚いた。

2日目 クロスセッション

2日目のクロスセッションでは、中国出身の福井大学大学院教育学研究科の史さん、市立札幌大通高等学校の長澤先生、そして自分の3つの報告が行われた。

史さんは、日本の教員養成のシステム・歴史について研究をしているとのこと。今回は、中国における教師資格試験に関する報告であった。中国では、「教師資格試験」というものがあり、それに合格しないと、講師にもなれないとのこと。合格しても、自然に採用されるわけではなく、自分から学校へ売り込みに行くことが必要なのだそうだ。「ぬるま湯」といわれることもある日本の公務員とは、スタート時点で違っているのだと感じた。そして、なによりも日本語で普通に会話し、難しい日本語も当たり前のように駆使して書かれている論文から、史さんの志の高さに驚いた。

長澤先生は、2018年度の「ハニー・オブ・ザ・イヤヤー」で最優秀賞に輝いたハチミツをつくり販売している「ミツバチプロジェクト」についてのお話をしてくださった。実は、一部のものだけの取り組みであって、全校的な動きにはなっていないこと、賞を取ったことで有名になったのに、関わっていない生徒は何も知らないという現状であるとのことだった。担当部署を決めると、「やらねばならない」ことにな

ってしまうので、立ち上げ時のメンバーで行っているとのことだが、理科教員として、「ハチミツプロジェクト」とコラボしていけることがあるはずと模索しているとのことだった。お話を聞いて、「『やらねばならない』では長続きしない。」「小さな集団（コミュニティ）からどうやって大きな動きにつなげていくのか。」といった課題は、校種を問わず、地域を問わず共通する課題なのだなと感じた。

自分は、昨年度の長畝小学校での「よくわかる授業」づくりのための「教材研究タイム」「ミニ・ワークショップ」「授業公開週間」の取り組みを中心に紹介させていただいた。これらの取り組みのための時間をどのように生み出しているのかについて、アンケート集計など、表には出にくい、担任の負担になっている業務を積極的に引き受けることで、担任の協力を引き出していることをお話しさせていただき、ファシリテーターの木村先生から褒めていただいた。また、今年度異動した加戸小学校での勤労生産学習について紹介する中で、総合での取り組みが教科につながったり、「探究」のテーマとなり得る可能性を教えていただいた。

新たに人間関係を築きながら取り組んでいくことになる今年。これまでの取り組みが間違っていなかったことを確認でき、少し自信を持つことができた。そして、はるばる福井まで「学ぶ」ために来てくださった先生方や「熱く語る」先生方の情熱に触れることができ、大変刺激を受けた2日間であった。これもラウンドテーブルに参加したからこそである。この機会を与えていただいたことに感謝して、「対話」を大切に取り組みを進めていきたいと思う。

福井ラウンドテーブルを終えて

授業研究・教職専門性開発コース2年／奈良女子大学附属中等教育学校 西澤 央泰

実践研究 福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions を終えて、自分が感じ、考えたことを書くために、自分がこのラウンドテーブルという場をどういう場としてとらえていたのかを書いておきたい。

自分は、ラウンドテーブルに参加させていただくのは、院生としては2年目になるが、1年目はこの場が何のために存在するのか、何が自分の学びにつながるのかがはっきりとはわからなかった。大学院入学後1年目の時には、クロスセッションで、英語を

母語とする方々とテーブルを共にし、自分のインターン校の特徴や自分の取り組みの紹介を英語で行った。確かに英語で自分の周囲のことを紹介するという取り組みは、自分の英語力の向上や自分のことについて再確認する機会にはなったのかもしれない。だが、大学院入学から間もなかった私にとって、「自分の実践」を語っているという感覚にはならず、本当にこれがこの学びになっているのかと疑問に感じた。また、同時に他の先生方の実践を聞かせていただく

機会を得ることもできたが、例えば、学校改革のための実践の報告は、自分には遠いことのように感じ、自分事のようにとらえることができなかったのを覚えている。他の先生方の実践に対し、自分が発表した内容は実践と呼べず、自分はここで発表するに値するのかという気持ちになった。

それから1年が経った。この1年間の中で、自分でも何か実践を作り上げようと学校の中で様々な取り組みを行うことができた時もあれば、何をしたいのかわからず、途方に暮れ、思考が停止し、何も考えられず、先生方から厳しく指導していただいた時もあった。そのような紆余曲折を得ながら、ここまで行ってきたことと、それに対して自分がどう考え、この先を行動しようとしているのかを2日目のクロスセッションで先生方に報告させていただいた。この時、自分の去年1年間の実践を生き生きと語ることができる自分に気が付いた。「自分の実践」を語ることができていると感じた。これは私自身がこの1年間先生方から指導され続けてきた「考えて、動く」ということをしてきたことによるものであると思う。自分自身が学校内で起こることを「自分事」としてとらえ、自分にできることは何か「考えて、動く」ことによって、「自分の実践」をしているという感覚になれたからであると思う。また、そのことを、同じテーブルの先生方にお話させていただいた時に、1人の先生から、「「考えて動く」ということは現職の新任の先生でも難しいこと。それを、インターンの中から学び取って、実行しようとしていることはすごいことだと思う。」というお言葉をいただき、自分自身がこの大学院で体得しようとしていることは、社会に出た時にも必要とされていることであるということを実感した。大学院生活が始まった後に、自分の成長を感じる機会は、それほど多くなかったと思っていたが、同じ、福井ラウンドテーブルという場を時系列で振り返ることによって、自分自身の成長を感じることでできた自身の報告の場であった。

加えて、自分が感じた変化に関して、他者の実践への共感や考えることができるようになったことも挙げられる。先述の通り、自分は他者の実践を聞いたとしてもどこか自分事として捉えられず、情報だけを得ようとしている節があった。だが、今回、ある先生

の実践の報告を聞かせていただいて、自分自身の感情が大きく揺さぶられることになった。その先生は、ベテランの先生であるが、今年の春に福井大学教育学部附属義務教育学校に赴任されてからの授業観のシフトチェンジを求められている。これまでは一般的な公立の中学校で、教科書の内容を丁寧に見ていく指導を25年間続けてこられていたが、授業のデザインを一新することになった。担当教科の教員は先生以外におられず、相談しながら授業を考えられない苦労や、自分をどのように良くしていけばいいかについて一度生徒と腹を割って話してみたいと思っていच्छることなどをお聞きし、このようなベテランの先生でも思い悩むことがあるということや、生徒と腹を割って話そうとする先生の勇氣に感服した。自分自身がこの報告に感情を揺さぶられたのは、自分自身もこの大学院に入学してから、所謂知識詰め込み型の学びの仕方から、課題を設定して、その課題を乗り越えるにはどうすればいいか考え、実践し振り返りを行うという学びの仕方に変化のために取り組んでいるからであり、この感情自体も自分が、「考えて、動く」ということに挑戦しているから出てきたことであると感じている。

自分が考えて動いたことには、自分の感情が乗り、それだけ他者の実践にも共感することができるようになる。「考えて、動く」こと。自分にとっては、まだまだ体得しきれていないものであり、これから克服していかなければならない課題である。だが、大学院に入学してから少しでも自分の学びの仕方が変化していると感じることができたのは、このラウンドテーブルという機会のおかげである。



今こそ、教師こそが、思考を止めない！

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス小学校 海東 直希

Zone A では、堀川小学校の政二先生、伊那小学校の宮川先生、札幌大通高校の西野先生が登壇されました。学校ごとに状況は異なるため三者三様でありながらも、見えてきたことは「できることをやる」先生方と「学びを止めない」子どもたちの姿でした。学校の状況と目の前の子どもたちの実情に合わせて、試行錯誤しながら実践を重ねられています。

例えば、堀川小学校では、伝統的に行っている朝の活動を、これまでと異なる方法で作れるよう子どもたちに働きかけたり、伊那小学校では、チャボの誕生を Zoom で中継して子どもたちと繋がったり。逆に、自主的に水やりに来てくれる子のことを紹介する場面もありました。子どもを見つめ、悩みながらも置かれた状況の中で最大限に工夫を凝らし、省察的实践を繰り返す先生方の姿がありました。不測の事態で、変わるものと変わらないものがあります。変わるものは実践の方法。変わらないものは、実践の目的、「子どもを見つめる」ことであり、教育の根っこにある色褪せることのない価値を再認識できたように思います。

—教師が思考停止になっていないか—

この言葉は、参加者の皆さんの脳裏に焼き付いた言葉の一つです。札幌ラウンドテーブルを立ち上げ、

「大人自身が挑戦する姿勢」を大切にし、体現される西野先生から発される言葉には、説得力がありました。自立・自律した人を育てたいという西野先生は、様々な大人の価値観に触れられる「本物の体験」を仕組み、大人と共に考える場の創造、友達同士励まし合う場の創造をされています。状況が変われど、学校は「自他共に高め合っていく場所」で在りたいとお話しされていました。このような状況だけれど、いえ、このような状況だからこそ、大人こそが思考を止めずに学び続けるべきだと、西野先生のお話から皆さんが感じ取ったことだと思います。

子どもたちは、学びを求めています。仲間も求めています。初めての事態、不測の事態で、我々教師にできることは何でしょうか。これまで、教育界は、変わらない・変わらない体質があったのかもしれませんが。学校の価値を見直さねばならない今こそ、子どもを改めて見つめなおし、教師自身が思考を、学びを、変革を止めない姿勢こそが、学校の新たな価値を創っていくのだと思います。大学院にいるからこそ、より深い学びができることに感謝をし、まずは2020年度を力強く歩みたいと思います。

働き方改革と学びあう学校づくり

福井県立丸岡高等学校 島田 芳秀

私の勤務校（福井県立丸岡高等学校）では、「福井大学連合教職大学院と連携した教員の指導力向上」が学校経営方針にあり、この3年間で2名の院生が学んでいる。また、本校生徒の探究活動の発表の場が、福井ラウンドテーブルの生徒ポスターセッションである。今回は、校長、教諭、生徒が各 Zone に分かれて参加させていただいた。

Zone B1 では、コロナ禍の困難な状況下での人材育成と働き方改革との両立を目指した実践が、オンライン会議システム（Zoom）にて報告された。オンライン会議によるラウンドテーブルは初めての試みであり、ネットワーク回線等でのトラブルもあったが、回線が繋がった喜びを参加者全員で共有でき、一体感のあるゾーンセッションとなった。

セッションでは、福井県の教育の動向に関しての話題提供(福井県教育庁 清川学校教育監)の後、「コロナ休校中の学習・生活に関するアンケートの結果」(岐阜聖徳学園大学附属中学校長 宮島先生)、「働き方改革と学び合う学校づくり～With コロナの経験を活かす」(福井大学連合教職大学院教授 牧田先生)、「コロナ禍での学びの保障と働き方改革」(丸岡高等学校 島田)の3つの実践報告が行われた。

宮島先生のアンケート分析からは、コロナ休校中の問題点があぶりだされ、参加者の学校の事例も紹介されるなど活発な意見交換がなされた。牧田先生の大学でのZoom活用では、働き方改革への有効性や諸課題が報告され、さらにZoom活用に向けた方向性も示唆していただき、今後に向けて貴重な意見交換ができた。

私(島田)からは、コロナ禍での働き方改革として次の4つの事例、①仕事のアウトソーシング(PTA、教育総合研究所、企業を巻き込む)、②外部人材の活

用(退職教員、市職員、大学生や大学教員)、③教員のやる気を育てる(学校現場を県のスタンダードにする)、④仕事にルール(授業動画作成で独自のルール)を説明し、これらの“働きやすさ”と“働きがい”を学校経営の柱にしていることを報告した。報告に対して参加者から多くのご質問やご意見をいただいた。これからの学校経営に活かしていきたいと思う。福井県内の小中高校では、6月から学校が再開された。臨時休業中に、教員集団が苦勞して作り上げた授業動画作成のノウハウや働き方改革の取り組み等が、学校再開後に活かされているだろうか。授業は、これまでのオールドスタイルに戻っていないだろうか。コロナ禍は、まだ始まりに過ぎない。第2波、第3波にむけて、コロナ禍での働き方改革と学びあう学校づくりを緊張感をもって進めていくことが必要であると、セッションに参加して考えさせられた。

看護実習に学ぶ

～社会教育実習必修化の年に～

明治大学 平川 景子

私は大学で社会教育主事課程の授業を担当しています。社会教育主事課程のある大学の教員と社会教育関係職員などで構成する、全国社会教育職員養成研究連絡協議会(社養協)の理事会で、福井大学の矢内琴江さんからラウンドテーブルのご案内があり、とくにZoneB2は社会教育職員の養成にかかわる人にも参加してほしいというよびかけでした。社会教育職員養成は、2020年度から新カリキュラムが施行され、実習が必修化していましたので、看護実習について学びたいと思い参加しました。

看護実習は、時間数や回数が長く、また今期については文科省・厚労省から「通達」が出ているということでした。病院も大学も感染拡大を恐れて実習ができない状況が続いている中であっても、看護職の専門性に関する厳しい規制を満たすために実習に送り出す方途を探っておられるのがわかりました。とく

に看護技術に関することは現場での実習が不可欠のようでした。

社会教育でそのような現場性にもとづく技術があるか考えました。「ファシリテーション・スキル」などということがありますが、私は技術を切り出して学ぶことはできず、実践の長い年月をかけた文脈とその経験のふり返りの中で培われていくものではないかと考えています。それでは、社会教育実習では何を学んでほしいのか。学生には、現場の職員と学習者の「関係」、それをお互いにどうとらえているかを感じてほしいと思います。また、その関係を育てるのに必要だった長い年月を知って、時間軸をもって学習を「支援する」ことの意味を考えてほしいと思います。

「関係」についていえば、今回のご報告で、看護実習中に脳卒中の手術後の患者にかかわった学生の記録が紹介されました。半身が動かない現実直面し絶望している患者の顔を拭きながら、実習生は「自分

で顔を洗えるといい」と考えたそうです。そして最初は患者がベッドで顔を拭けるように、次には洗面所まで行って洗えるようにと、支援していったということでした。実習生は最初から意図していなかったかもしれませんが、実習の展開をとおしてみると、回復の目標を立て、自立に向けて支援することを、継続的な支援によって実現していると思いました。こうした実習は、1年間に何度も現場実習を経験し、それ

を大学で省察しているカリキュラムの中で、実現しているように思いました。

一方で社会教育実習は卒業単位ですらなく、学生はカリキュラムの隙間を縫って実習に行くような実態なので、条件がかなり違うのだと実感しました。この困難の年にあっても、看護実習で当事者（患者・学習者）を支援する関係を学んでいたように、社会教育実習でも学生が関係を実感したり、見て学んだりすることを、なんとかしてめざしたいと思います。

考えさせられ、元気づけられたラウンドテーブル

岡山市教育委員会生涯学習課公民館振興室 内田 光俊

ラウンドテーブルで聞いた実践の中で一番印象的だった報告は、田んぼで打ち上げ花火イベントを企画して資金を集めて実行に移された、福井市の河合公民館職員の藤田さんの報告でした。その行動力は本当にすごいと感心しました。普段の活動の中で培ってこられた住民の皆さんとの信頼関係があったからこそでしょうが、職員の思いの強さが周りの人たちの共感を呼び、協力を生み、成功につながるのだと感じました。

岡山市でも公民館らしい仕事ができず、意気消沈する職員が出ていました。一方で、こうしてピンチの中でも住民や地域のために何か新たなことに挑戦しようという気概や発想力を発揮される職員がいる。私たちは「ピンチこそチャンス」を確信にしたいと思いました。

話し合いの中で出された話では、公民館に集まらない中で、はがきの裏面に絵などを描いてもらって公民館に持ち寄ってもらう取組みやマスクを集めて必要のところへ届ける活動、ケーブルテレビを使った公民館講座の発信、オンライン会議なども取り組まれていることが出されました。

一方で、高齢者はこうした手段を使いこなせない傾向があること、若い世代は会えなくても SNS など

で情報交流ができていることも共有されました。そのことから、ICTのスキルアップのための学習は、高校生が教える側になって高齢者とともに学ぶとか、三世代で共に学ぶなどの方法が有効だという話も出ました。

会えない中で地域活動についての合意を作ることが難しく、一部の人の相談で決まる傾向があり、不満も出がちだという問題も出されました。地域づくりのプロセスは、特にその中での対話や話し合い、合意形成の体験の蓄積を通じて住民の中に民主主義的な力を育て、それが自治の力になっていくものです。そのプロセスが難しくなっていくことははっきりしてきました。その困難を乗り越える知恵を出さないと、公民館は本来の力を発揮できません。

自治活動が担い手不足で後継者がいないなどの問題を抱えながら、若い世代、特に中高生などを担い手として役員の中に入れて、その声を活かしていく発想がありません。その現状を変革していくチャンスともいえると考えました。With コロナと言われる社会で、今の地域の在り方を望ましい方向に変容、変革していくチャンスだととらえて、積極的な取組みを考えていく必要があると考えました。

教職大学院 Newsletter **No.167**

2023.2.18 発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp
